

## トレス海峡ヨーク島の歌の旋律

——キリスト教聖歌と伝統的ダンス・ソングの比較——

畑 道 也

パプア・ニューギニア西南海岸部とオーストラリア大陸との間に横たわるトレス海峡諸島には、大きく分けて二種類の言語がある。東部諸島の Miriam と、中部・西部諸島の Kala Lagau Langgus である〔Bani, 1976, p. 3〕。

1871年、ロンドン宣教協会 (London Missionary Society, 略して L. M. S.) によって開始された海峡全域にわたるキリスト教化以後今日まで、海峡諸島民(アイランダーズ)は数多くのキリスト教聖歌 (hymn) を土地の言葉でつくってきた。

1914年、海峡のキリスト教布教は、ロンドン宣教協会から英国国教会 (Church of England) に引継がれた。1973年、オーストラリアの北クイーンズランド管区にトレス海峡諸島省 (Torres Strait Island Ministry) が設立されたのを機に、同省は、海峡諸島に伝わる聖歌を集め、“Eastern and Western Hymn Book and Liturgy” を出版した。土地の言葉による聖歌 (“language hymn”) の歌詞集である。楽譜はない。西部・中部諸島の言語 (Kala Lagau Langgus) による 247 の聖歌と、東部諸島の言語 (Miriam) による 204 の聖歌がおさめられている。

アイランダーズは楽譜を使わない。各島の教会の礼拝では、英語の聖歌と土地の言葉による “language hymn” が交互に歌われるが、聖歌の歌詞と旋律は、アイランダーズによってすべて記憶されている。伴奏にオルガンは用いない。教会

堂にオルガンは置いてない。英語の聖歌も“language hymn”も、メラネシアに共通の砂時計型ドラムの拍打による伴奏だけで歌われるのである。

英語の聖歌と“language hymn”はもとより伝統的なダンス・ソング等のすべての歌唱は合唱の形態をとる。いわゆるヘテロフォニー (heterophony) である。歌唱のリーダーが主旋律 (“tune”) を歌いはじめると、やがて他の声部 (“tenor”, “base”) が加わって、主旋律を旋律的に、また和声的に飾り、響きを豊かにする。

各声部は男女混合で歌われる。男女では声域に差があるから、それぞれの声部は男女でオクターブを隔てて歌われることになる。そのため、主旋律よりも高い音域で他の声部が歌われることがしばしばあり、トレス海峡諸島独特の歌の響きが生じる。

聖歌とダンス・ソングの歌唱に共通するヘテロフォニーの伝統は、一体、いつごろから始まるのか。また、“language hymn”や伝統的なダンス・ソングの旋律は、純粋にトレス海峡のものなのか、あるいは他の影響下にあるものなのか。

トレス海峡諸島のキリスト教の布教開始は、すでにのべたように1871年にさかのぼる。ロンドン宣教協会の2人の白人宣教師 Samuel MacFarlane と Archibald W. Murray が8人の南太平洋ロヤルティ諸島出身の伝道者を伴ってロヤルティ諸島のリフ島を出帆し、トレス海峡の東部諸島の一つであるダーンリィ島に上陸したのが1871年の7月1日であった。伝道の初期において布教の最前線を担当したのはリフ島出身の伝道者であったが、すぐにサモア人伝道者が彼らにとってかわった。

ロンドン宣教協会は組合教会派 (Congregational) を中心とするプロテスタント諸教派による布教団体であった。この団体がトレス海峡で行なった布教活動はかなり急進的だったようで、旧来の諸信仰<sup>(4)</sup>の聖所を破壊し、聖器物を破棄して、土地の信仰と祭りに終止符を打った。呪術、宗教儀式、成人式 (initiation rites) 等の多くの伝統文化がキリスト教の導入によって破壊され、ほとんどの人々から捨てられ、そのさい、宗教的な歌や踊りは、ポリネシア起源のものにかわったと

さえ言われる〔Finch, 1977, p. 44〕。

また、伝統的な土地の歌と踊りを禁じられたアイランダーズは、他の太平洋の地域の歌と踊りを許されて、それらを採用しだしたとも言う〔Laade, 1977, p. 7〕。そして、サモアの sitting dance<sup>(6)</sup> を別にすると、南太平洋諸島のロトゥマ (Rotuma) 島のダンスが最も普及した〔Laade, 1977, p. 7〕。

さて、キリスト教聖歌 (hymn) の伝来についてはどうであろうか。1977年の調査当時、中部のヨーク島の牧師をつとめていた Langley Warriia 司祭 (当時71才) によると、ロンドン宣教協会のサモア人伝道者自身が聖歌をつくってアイランダーズに教えたと言う。そのさい、すでに聖歌は、主旋律 (“tune”) の他に、“tenor” や “base” の声部をもっていた。それに対して、ダンスの方は、最初に上陸したロンドン宣教協会のリフ島からの伝道者が教えた。そしてダンス・ソングは主旋律しかなくて、英国国教会の時代になってから、“tenor” や “base” の声部を加えて歌うようになった。“tenor” や “base” の歌い方は教会で指導され、それがダンス・ソングの歌唱にも取入れられたのである。

が、同じ中部諸島の一つヤム島で得た情報は、少し違っていた。すでに100才をこえているとヤム島の人々に信じられていて、生年を自分自身でも記憶していない Maletha Kebisu によれば、最初にヤム島で聖歌を教えたのは、リフ島出身の伝道者ではなくて、すぐ後に来たサモア人伝道者だったが、教えられた聖歌は主旋律だけであった。一方、ダンス・ソングは、島に居たロトゥマ人が伝えた。ロトゥマ人は同時に “tenor” や “base” の唱法を教えた。そのロトゥマ人は、聖職者ではなかった。そして、このロトゥマ人がヤム島の人々に教えたダンス・ソングのスタイルは、今日のものと同じであると言う。

Maletha Kebisu が、はたして100才をこえる年令であるか否かは別にして、2人の古老から得た情報には、細部に違いがある。が、記憶や伝承の異同をこえて、アイランダーズたちは、キリスト教聖歌や、今日の伝統的なダンス・ソングの音楽の様式が “south sea” に由来すると固く信じているのである。

また、キリスト教布教以前からしだいに盛んになってきていたナマコや白蝶貝、

高瀬貝採取漁の労働者として、南太平洋の島々やフィリピン、インドネシア、後には日本からも、多数の人々がトレス海峡にやってきた。アイランダーズ、つまり「トレス海峡諸島民」と呼ばれる現在の居住者は、ほとんどこの海域で生まれ育った人たちであるが、各家系をたどれば、2, 3代さかのぼってほとんどすべてが南太平洋の各地からの移住者にいきつく。外来者の血のまじらない純血のトレス海峡人はごくまれにしか存在しない。

単身または数人で三三五五やってきた青壮年男子の伝道者や労働者は、海峡諸島の女と結婚し定住して社会に溶けこんでいった。そして、ここ2, 3世代を経るうちに、南太平洋からの移住者が混血しながら絶対数においても、また社会的地位においてもトレス海峡の主要民族になったのであった〔松本, pp. 423-4〕。歴史書にもあらわれない静かで小さな民族移動が、ほぼ1世紀前にあったのである。19世紀後半のトレス海峡は異民族のるつぼ (melting pot) であった。その結果、労働者としての原住民と外来移民、伝道者、経営者・支配者としての白人が、ここをるつぼとして新しい民族を形成するに至ったのである〔大島, 1981, p. 41〕。

したがって、今日のトレス海峡の音楽文化の中に、純粹にトレス的なものを見つけることは、きわめて困難である。キリスト教布教以前の音楽については、A. C. Haddon の率いたケンブリッジ大学調査隊の報告書中に、かなり詳しく記録されている (Haddon, Alfred C. ed. (1912): Reports of the Cambridge Anthropological Expedition to Torres Straits Vol IV, Cambridge.)。が、ここにみることのできる音楽と、今日の伝統的なキリスト教聖歌およびダンス・ソングとの間に、直接的なつながりを見出すことはきわめて難しい。

このようなわけで、以下の音楽的考察の対象は、キリスト教化以後の「伝統的」なダンス・ソングと聖歌に限らざるをえない。聖歌とダンス・ソングの旋律的特徴を比較するための材料は、1977年8月21日と22日にヨーク島 (Yorke Island) で採録したものから選んだ。ヨーク島はトレス海峡中部諸島の一つである。歌唱のリーダーは、Langley Warriia 牧師 (当時71才) であった。

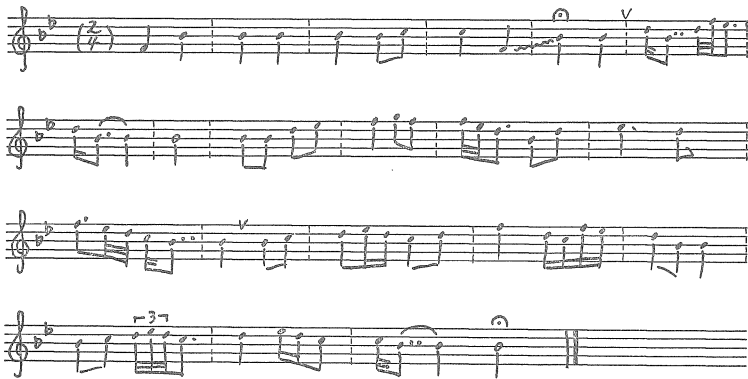
以下、旋律の分析のために、下記の略号をつかう。

P=perfect (完全音程)	2=second (2度音程)	TC=tonal center (中心音, 終止音)
M=major (長音程)	3=third (3度音程)	
m=minor (短音程)	4=fourth (4度音程)	
a=augmented (増音程)	5=fifth (5度音程)	
	6=sixth (6度音程) and so forth	

矢印 (→) は、後続する音を示す。

まず、キスト教聖歌の旋律のうちで、もっとも基本的な形態と構造をもつものとして、Hymn (Naupuidaika) 37 の旋律をあげる。

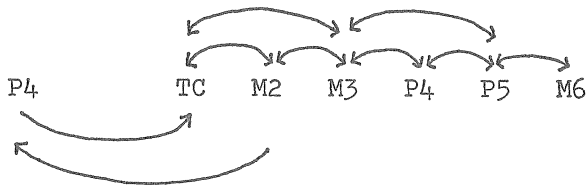
譜例1 Hymn 37 “Ibupoidan ngoi” (われらを助けたまえ)



この旋律の構造を把握するため、中心音を設定し、旋律を構成する一つ一つの音を、中心音との音程関係に置きかえ、同時に音程相互の運動関係を矢印で示すと、次のようになる。

尚、TC (中心音) として、ここでは楽曲の終止音を選んだ。

TC の左側に並べた各音程は、TC よりも低い音域にあり、また TC の右側に並んでいる音程は、TC よりも高い音域にある。



こうして、Hymn 37 の旋律を中心音との音程関係におきかえ、各音程間の運動関係を加えて図示すると、次のような特徴が明かになる。

この旋律は、TC の完全4度下の音から TC へと完全4度跳躍して始まり、最後は TC に終る。

TC の上の M3 を中心に、TC↔M3、M3↔P5 のいわばシンメトリックな3度(音程)関係が成立している。

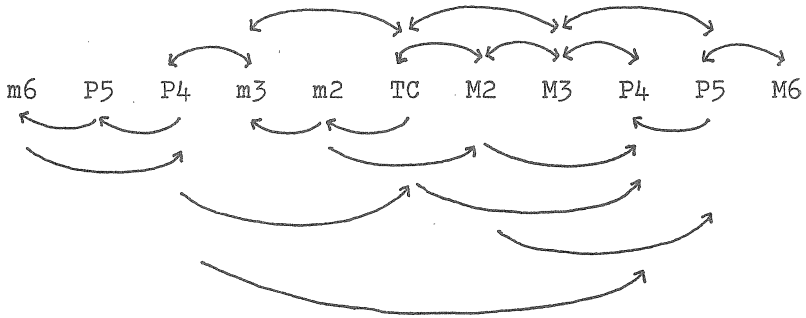
楽譜にみる旋律の輪郭(Contour)は、はじめに現れる延長音(♫)以後、ほぼ2小節単位でなだらかな山型を描いている。

M3 をはさんで、TC↔M3↔P5 という3度(音程)関係と、それぞれ TC を基底にしてくり返す山型の旋律線は、この聖歌の旋律が、かなりヨーロッパ的性格の濃い旋律であることを示している。さらに TC の同音反復が目立ち、それによって中心音の存在を印象づけ、中心音の支配力を安定させる結果になっている点も、この旋律の中心音が、ヨーロッパ的な「主音」の性格を帯びていることをあらわしているといえよう。

次の譜例2の聖歌の旋律にも、TC 上の TC↔M3、M3↔P5 の3度関係が成立している。と同時に、楽譜をみると、TC の同音反復がやはり存在する。が、旋律線は、交互に山型と谷型を描く。谷型の旋律線は、さきの Hymn 37 にはみられなかったものである。さらに楽譜の4段目の末尾と5段目の最初と最後には、一方的に下降する旋律線があることに留意したい。また、下段の矢印が示すように、完全4度音程による跳躍とオクターブの跳躍が目立ちはじめる。音程の急上昇の結果は、必然的に下降的な旋律を生むことになる。

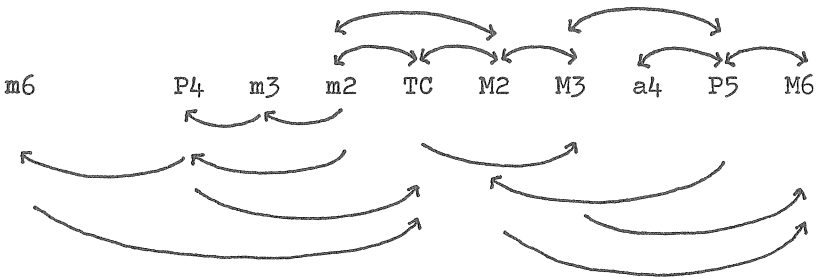
譜例2 Hymn 69 “Matha mina danalaig gimal”

(天上の至福)



次に、「伝統的」なダンス・ソングの旋律をあげて、聖歌の旋律と比較してみ  
る。

譜例3 “Mutulu pudi” (静かな天気)



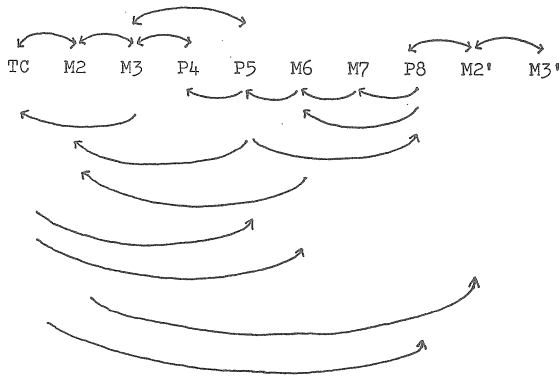
このダンス・ソングの旋律では、さきの2つの聖歌にくらべて TC↔M3, M3↔P5 の関係がやや弱くなっている。完全4度・5度, 6度(音程)の跳躍がみられ



る。したがって楽譜にみる旋律線も、音程の跳躍による上昇の後、ゆるやかに下降する傾向が強い。

同音反復も、中心音にだけでなく、数種の音程にも現れ、中心音の支配力が聖歌ほど強くないことを示している。

譜例4 “Ngalmun zaget naki” (われらの仕事はここ)

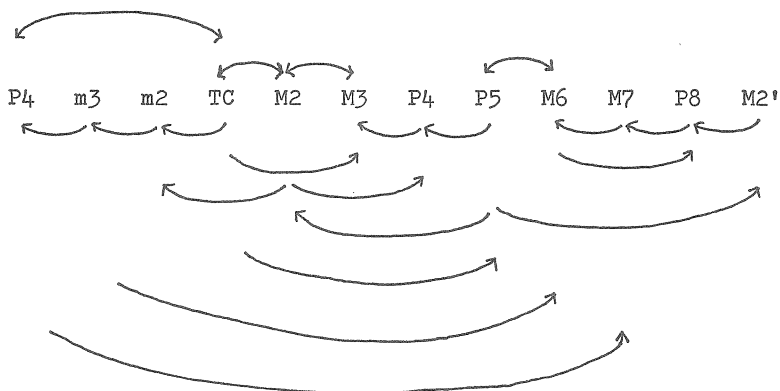


このダンス・ソングの旋律は、音域的に TC 上に形成されているにもかかわらず、TC→M3 の動きがない。完全4度・5度、6度、オクターブの急な跳躍がある一方、こきざみに下降する音程が目につく。つまり、急上昇の後、ゆるやかに下降する旋律が支配的である。矢印のあらわす音程間の運動をみても、また、同音反復が各種の音にあることから、中心音の支配力が、聖歌にくらべてずっと弱いことがわかる。

尚、譜例3と4には  $\square$  で示した旋律型が共通に存在する。ダンス・ソングの旋律の定形の一つと考えられる。

譜例5 “Kara mama ngarmun sagur” (母なるダンス)

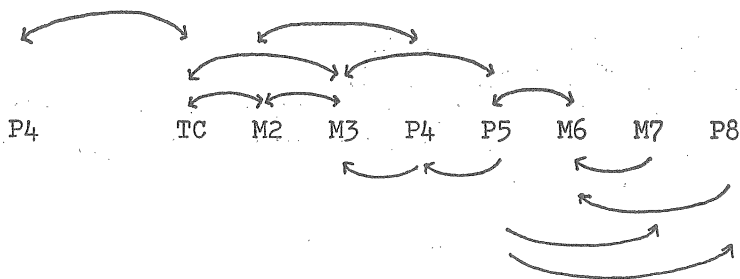
このダンス・ソングには、完全4度・5度、6度、オクターブに加えて11度の跳躍までがあり、大きな音程の跳躍による急上昇の結果、時間をかけてゆるやかに下降していく旋律線によって全体が構成されている。



以上、3つのダンス・ソングに共通してみられた旋律的特徴は、TC上に構成される音程の3度関係が聖歌ほど厳密ではないこと、中心音の支配力が聖歌ほど強くないこと、急上昇の後にゆるやかに下向するいわゆる“tumbling”型の旋律が支配的であることであった。が、次に示す Hymn 68 の旋律には、これらダンス・ソングの旋律とよく似た特徴がみられる。

譜例6 Hymn 68 “Augad ai muluka waiyane”  
(神よ、聖霊をおくりたまえ)

The musical score for Hymn 68 is presented in four staves. The key signature is one sharp (F#) and the time signature is 3/4. The first staff shows the main melody with a bracket under the final two notes. The second staff is marked "Chorus" and shows a different melodic line with a bracket under the final two notes. The third staff is also marked "Chorus" and shows a different melodic line with a bracket under the final two notes. The fourth staff continues the main melody with a bracket under the final two notes. Brackets and arrows highlight specific intervals and groupings, similar to the diagram above.



この聖歌の旋律では、最初にあげた2つの聖歌と同じく、TC上のTC↔M3、M3↔P5の3度（音程）関係が保たれている。が、楽譜の1段目の後半部と、3段目の最後から4段目にわたって、「下降的」とよんでもよいような傾向が旋律のなかにみられる。しかも、      で示した旋律型は、譜例5のダンス・ソングにもみられる。

つまり、聖歌の旋律とダンス・ソングの旋律は、互いに典型的に異なる例を意図的に選んで比較すると、それぞれかなり違う構造と形態をもっていると言えるが、同時に、素材を交換しあったり、一方が他方の様式に近づいていく可能性もあると言えよう。

以上、中心音に対する音程関係から聖歌とダンス・ソングの旋律の比較をしてみた。が、これらの聖歌やダンス・ソングの旋律は、つねに、ヘテロフォニーの様式で合唱されるのであるから、トレス海峡諸島の音楽を論じる場合、そのヘテロフォニーの構造を明かにする努力をさけるわけにはいかない。それとともに、この約100年にわたる南太平洋の音楽の影響についてもできるかぎり調べる必要がある。また、1977年と79年の現地調査の機会にはついに訪れることのできなかつた東部諸島のマリー島（Murray Island）には、今なお執拗に旧来のマロ＝ボマイ（Malu-Bomai）信仰が残存し、土地固有の信仰にまつわる音楽もあるようだ。残した課題は多い。

## 註

- (1) 在来信仰については、下記を参照のこと。  
大島 (1981), 北大路 (1977), 松本(1979)。
- (2) トレス海峡諸島では、今も sitting dance がおこなわれている。今日の伝統的なダンスのプログラムの最後に、参加者全員が地面に車座になってあぐらをかき、手拍子をまじえて上半身だけで踊る慣習がある。

## 参 考 文 献

- BANI, Ephraim (1976) : The Language Situation in Western Torres Strait.  
(Sutton, P. ed. : Language of Cape York) (Canberra)
- FINCH, Noel (1977) : The Torres Strait Islanders, Portrait of a Unique Group  
of Australia. (Brisbane)
- HADDON, Alfred C. ed. (1912) : Reports of the Cambridge Anthropological  
Expedition to Torres Straits vol. IV. (Cambridge)
- LAADE, Wolfgang (1977) : Traditional Songs of the Western Torres Straits,  
South Pacific. (Text of Folkways Records Album No. FE4025) (NYC)
- 北大路弘信 (1977) : ボマイ神話、その構造と意味。(民族学研究, 42-3)
- 大島 襄二 (1981) : 伝統文化とキリスト教——文化変容の地理学的研究。(共同研究「伝統文化とキリスト教——アジア・オセアニア地域——」) (関西学院大学)
- 松本 博之 (1979) : マビオグ (Mabuiag) 島における気象現象の認知について ——トレス海峡諸島の伝統的環境観の一面。(愛媛大学教養学部紀要Ⅻ)
- (?) : アウトリッガーカヌーに関する覚え書き
- 瀬川 真平 (1978) : 統トレス海峡諸島調査記 (3) ある老人の回想記——ダーンリィ島社会史。(地理23-9)